

第5講 古典学説に対する批判

古典学説の修正：考古学的知見の増大による

(例1)

1950年代のカスキーによるレルナの発掘：前2150年頃にタイルの家を含む破壊層の存在の発見→ギリシア人の移住時期を150年程溯らせる。

(例2)

エジプトのメディネット・ハブの葬祭殿に描かれている「海の民」の記録：メルネプタハ王の末年とラムセス3世の治世の初め→イリュリア人の大移動にドーリス人の移動を関連付ける。

前2150年頃、北方からギリシア人の侵入、前期ヘラディック文化の破壊と中期ヘラディック文化（ミニュアス式土器）
前1200年頃、イリュリア系の人々の通過→ミケーネ文明の滅亡
前1150年頃、ドーリス人の南下とイオニア系の人々の逃避→鉄器時代への移行

今日では

考古学：新石器時代～青銅器時代～鉄器時代にかけて主要な遺跡の文化層は断絶していない。

中心地は何時の時代でも人々の集まる場所であったし、聖所は何時の時代でも聖所として人々に崇められていた。

(例：アミュクライのキュリアキの丘)

土器層の変化も破壊層以前の時期にプロトタイプが現れているし、破壊層の後にも以前の土器が出現している。

(例：レルナ)

鉄器は青銅器時代に既に貴金属としてギリシア本土に現れていたし、武器としては東方の島に既に導入されていた。

火葬も絶対的ではなく、時代と社会層の違いによる流行があり、

一概に断定できない。

このような見方の変化は遺跡の地層や遺物などから破壊局面を見ようとするのか連続性を発見しようとするのかという考古学者の姿勢によって影響されることが大きい。

第二次世界大戦後のギリシア人考古学者たちの主張が西欧の諸研究者に共有されるようになったことも無視できない。

言語学：青銅器時代の末期までギリシア語の方言分化は認められない＝コイネー（標準語）

ギリシア語の方言分化は前 1000 年頃から始まる。

コイネーからの分化は東方方言群、特にイオニア方言において著しい。＜ペルシア人（マード）、マンダ（バビロニア語）、マードイ（ドーリス方言）、メードイ（イオニア方言）。

母の名詞：マテ（線文字 B）、マーテール（ドーリス方言）、メーテール（イオニア方言）。

ギリシアの外にギリシア語の言語母集団が存在していたのではない。

ギリシアの中に言語母集団が存在していた。

ギリシア語の方言分化は比較的新しい現象であって、鉄器時代に入って生じた。

ドーリス方言がコイネーと呼ばれる母集団の言語に近く、イオニア方言がコイネーからは最も遠い。

問題の発展

従来のように破壊層ばかりに目を向けるのではなく、遺跡の持つ意味を遺跡を含む環境の中で評価し、その意味に変化が生じているのかどうかに注意するべきである。

文化の変化を流行の変化として捉え直すべきである。そうすると文化的変化は連続した流れの中で生じていることに気がつく。

一定の空間の中で人々の移住は認められる：社会や経済のあり方の変化によって中心地への集住と周辺部への分散を繰り返してきた。

集住局面：ヘレニズム～ローマ時代；ビザンツ～トルコ時代；現代。

分散局面：初期青銅器時代；後期青銅器時代；古典期；古代末期～ビザンツ時代；19世紀。

同じような現象はイスラエルの古代遺跡についてもいえる。農村部に分散するか中心として集まるかの繰り返しであって、アブラハムの民の移動ではない。

しかし余り厳格に考えるべきではない。地中海は太古以来人々の移動の流れの中にあり、様々な集団がギリシアの地を移動していった。前1200年頃の黒色磨研土器を制作した集団の移動（ブルガリア→ティリンスやミケーネ→ロドス→キプロス／トロイ）。

後12世紀のアルバニア人。